

キレーエフスキーにおける

「ナロード」の概念

——訳語の問題に触れながら——

長 繩 光 男

「ナロード」народとは動詞 народиться (沢山生まれる) に由来し、第一義的には「一定の空間に生まれた人々」を意味する。そしてこの空間をよぎる視点の差が、「人々」の現実的なありようを示すいくつかの意味を派生する。すなわち、「共通の言語を話す国 страна の住人」、「共通の支配の下にある国・国家 государство の住民」、そして更に「平民 чернь、庶民 простонародье、貢租を納める下層階級」等である。これらはいずれも「ダーリ」に依ったものだが、ここには計らずも、不平等社会の生成過程を辿ることができて興味深い。その意味で、このそれぞれに「人々」、「民族」、「国民」、「人民」等の訳語をあてはめてみても、この移りゆきのニュアンスを再現することは到底できない。それゆえ、本来的には、народ はあくまでも「ナロード」と記すほかはない。

しかしながら、現実には、народ という語に盛り込まれた具体的なイメージが人によって異なり、しかもその相違が各人の思

想性の違いと密接に関わっている以上、そのイメージの違いは、少なくとも外国の者にとっては、訳語の違いとしてあらわされなければならないだろう。

例えば、西欧主義の左派に位置し、今日「ロシア社会主義」の祖と仰がれるアレクサンドル・ゲルツェン Александр Иванович Герцен (1812—1870) の場合、народ とは何よりもまず、ツァーリズムの圧政に呻吟する農奴農民のことであり、ひいては、西欧資本主義諸国の被抑圧者の階層たる下層の市民、都市労働者、農民等の総称であった。しかも、彼はこの народ に、プチブル根性をその特質とする西欧のブルジョア文明と全く無縁な人々、道徳的に無垢な人々を想定していたのである。彼が народ に来たるべき「社会(主義)革命」の原動力を求めるのはそのためであった。このような народ 観は当時の左翼的思想家にとって多かれ少なかれ通常の観念であったといつて大過ないだろう。とすれば、この народ には、「国民」、「民族」等の訳語は全く不適切で、反体制的イメージを伴った「人民」という語こそ、最もふさわしいと言うべきだろう。

他方、初期スラヴ主義者の中でも最左翼と見なされ、無政府主義者バクーニンをして自らの思想の先駆者と呼ばしめた、コンスタンチン・アクサーコフ Константин Сергеевич Аксаков (1817—1860) にとつて народ とは何よりもまずプブリカ публики の対概念であった。публика とは一定の教育を受け読み書きの術を心得、それゆえ多かれ少なかれ西欧文物の影響

下にある人々のことで、具体的には主としてピョートル大帝以降の歴代政府を支える官僚・小役人と、反政府的な「進歩的」知識人とが念頭におかれていた。これに対して *народ* は無学文盲であるがゆえに、却って、ロシア古来の正教倫理・謙譲の美質を今に伝えるものと想定され、拝跪の対象とされるのである。このような *народ* にもまた「国民」、「民族」という訳語は不適切だろう。また、「人民」もその能動的な反体制のニュアンスのゆえに妥当性を欠く。そこで、私は、その「無学」という属性に重点をおき、政治的な意味合いに関しては比較的ニュートラルな「民衆」の語をあてたいと思う。

これに対して、初期スラヴ主義者中、保守的傾向の最も強いイヴァン・キレーエフスキー *Иван Васильевич Киреевский* (1806—1856) にとって *народ* とはどのような概念なのか、そして彼の *народ* 観は彼の保守主義とどのような関係にあるのか——この問題を、右にあげた二つの例を比較の対象として念頭に置きながら、従って、部分的には訳語の問題におきかえながら、考えてみようというのがこの小文の目的である。

もっとも、初めにお断わりしておくならば、私は先にあげた二人の場合、彼らの用いる *народ* なる語を全て常に「人民」ないし「民衆」と訳すべきだと主張するつもりは毛頭ない。一般に、他の多くの単語と同様、*народ* なる語も、例示した「ダリー」の語義の全てを同時に包括するものとして存在する以上、訳語は個々の用例毎に、それぞれの文脈に即して決定されるべきであることは言うまでもない。その意味で、私が先に取り上

げたのはこの語に関する各人の主観であり、また、それぞれに与えた訳語はあくまでも、それらの相違を際立たせんがため
の便法にすぎなかったのである。以下の議論は右と同様の趣旨
に則って行われていることを、予め御諒承いただきたいと思う。

* * *

議論はまず消去法からはじめよう。その際、第一に検討の対象となるのは、ゲルツェンやアクサーコフ的な意味における「ナロード」|| 「人民」「民衆」説、あるいは、ダリーによる最後の意味における「ナロード」|| 「庶民」「平民」説の妥当性の問題である。

この点に関して結論的に言えば、キレーエフスキーは *народ* を右のような意味で用いることを、むしろ意識的に避けているように思われる。このことを最も端的に示しているのは、一八四七年、モスクワの友人たちに宛てた手紙の一節である。この当時、スラヴ派と西欧派の意見の対立は、すでに人脈上の亀裂にまで発展していたが、同時に、両陣営内には早くも見解の齟齬が目立ちはじめた。キレーエフスキーはこの手紙の中で、スラヴ派内の意志統一を計るため、徹底的な議論を呼びかけ、そのためのいわばたたき台として、彼自身いくつかの論点を挙げていたのであるが、*народ* あるいは *народность* (ナロードノスチ) の理解をめぐる問題点もその一つであった。彼は書いて

「*народность* についての概念自体、我々の間では全くまち

まちです。ある者にとってこの言葉は、いわゆる простой народ (プロストイ・ナロード＝庶民) だけを意味し、また別のある者にとっては、我が国の歴史に体现されている、あの народ の独自性の理念を意味し、またある者には、我が народ の生活と習慣の中に残っている教会組織の痕跡を意味している、等々です。こうした諸概念には、いずれもある普遍的なものもあり、また、特殊なものもあります。この特殊なものを普遍的なものと思ひ違えることによつて、我々は互いに対立し、本来あるべき概念の正しい発展を妨げ合つてゐるのです。更に、これらの特殊な概念の一つ一つはそれ自体矛盾しており、そのことによつて、認識の未熟さを証明しています。例えば、народностьへの志向に、いわゆる我々の救済の条件や、ロシア文化の可能性、ヨーロッパの救済と科学・芸術の発展との可能性等々を想定しながら、他方 народность をプロストナロードノスチ (простонародность＝庶民性) に限定することは、ナロード的なものの原理からこの простонародность に含まれていないあらゆるものを排除し、その中に含まれている真にナロード的なものを一面的な形で理解すること、すなわち、простонародность におけるその特殊な反映をその正常な表現とみなすことを意味しています。更に、この概念においては、暖炉の中の枯枝のように燃え尽きてしまうことを潔しとしない全ての人に対して、このような народность にもとるあらゆることを自己の内部で和解させ、内的にも外的にも простой народ (庶民) の物の考え方と趣味とに合致するように自己を形成すべく、その

精神の全力を傾注するように要求されていることを付け加えるならば、この要求にはより一層の無思慮が含まれていることを認めないわけにはいきません。何故ならば、真理の原型を念頭において各自に働きかけることを人に要求しようとしても、それはあくまでも、真理の原型にかかわるがゆえにこそ是認しうることなのです。また、просветительский 民性の実現のために挺身することとを容認しうるのは、この庶民性が真理そのものの直接的現われである場合に限られます。しかし、こうした仮定が無理である以上、この要請もまた、依然として不可能なのです。」(II—247)

自ら挙げた幾つかのナロード観のうち、「庶民」説にのみこれだけの批判を費したところに、この説に対するクレイエフスキーの拒否反応の強さを読み取ることが出来るだろう。しかも、народ を простой народ から区別しようというこの意識は極く初期の著作から晩年にいたるまで一貫しているのである。初期(二一三〇年代初頭)の著作に即して言うならば、народ, народность は多くの場合、нация, национальность、すなわち nation, nationality と同義的に用いられているのに対して、「民衆」ないし「庶民」の内容を表わすのに用いられているのはトルバーゴナや простой народ であり、また、読者大衆あるいは観客大衆という意味でプーブリカ публики も使われている。その上、これらの言葉がいずれもおおむねマイナスのイメージを伴って語られていることは、とりわけ注目し得る。ここでは典型的なものとしてただひとつの例をあげるにと

どめる。それは留学地ドイツ（ベルリン）からの手紙の中でのことである。彼は観劇にことよせドイツの観衆 *публика* の悪趣味をあげつらい、町の庶民 *простой народ* の陳腐な地口に眉をひそめつつ、結論的にこう書いている。「しかし庶民が愚かしくないとどこにあるでしょうか、大衆が大衆でないところがどこにあるでしょうか。」(I—29) ここにいう「庶民」がこの引用に先立つ部分の *простой народ* の単なる言い換えであることは明らかであろう。

庶民・大衆に対する彼の蔑視観は、西欧における四八年革命の余波がロシアにも及び、農奴解放が具体的な政治日程にのぼりつつあった五〇年代になると、いよいよあからさまになって来る。元来、彼は決して農奴制賛成論者ではなかった。しかし、現時点での解放については、消極的ながら反対派に与していた。そしてその論拠となっているのが、他ならぬ、彼の大衆観・農民観であった。つまり、農民に必要な以上に土地を与えて解放してしまつては「自分たちの生計に必要な限りにおいてのみ仕事を求める」という彼らの「習性」からして、地主の土地で働かなくなってしまうだろうし、また、仮に農民を解放してみたところで、彼らが「酒場や役人の手にかかって短時日のうちに零落すると同時に、墮落してしまうであろうことは疑いない。」(II—254, 255) それよりもこれまで通り地主の庇護下にあつた方が農民にとってどれ程幸せであろう。何故ならば「いかに質の悪い地主と言えども役人に比べればはるかに良心的であり、また、良心の他に、彼らには権力の濫用を抑制させる名誉心と

いうものがある」からだ (II—242) というのだ。まことに身勝手な論理という他ない。

更に、最晩年に属する一八五五年末、クリミア戦争の敗北にふれた手紙の中で、彼はこの敗北を「ロシアの正教精神—真のキリスト教信仰の精神がロシアの社会生活・家庭生活に実現するため」の高価な代償と評価しながらも、「ひとつの危惧の念を表明している。それは *народ* と *простой народ* とを混同することの危険である。彼は次のように書いている。

「しかしながら、ロシアの *народ* の精神への志向には、遺憾ながら多くのことを混乱させるところの、しばしば見受けられる思い違いの可能性があります。

ロシア精神という言葉で意味されているのは正教的な、真のキリスト教精神による全人類の知性の振興ではなく、西欧思想の単なる否定にすぎません。 *народ* 的といった場合、意味されているのは国家の全構成ではなく、ただ庶民的なものの *простой народное* だけ—すなわち、打ち倒されて久しく、従つて最早再生不能な、消滅しかけた従来の社会形態の混沌たる痕跡だけです。精神は生きものです。しかし、破壊された形式をこれによつて満たそうとした時、それは飛び去ってしまうのです。」(I—81)

右の引用からもうかがえるように、*народ* と *простой народ* とを区別すべきだという執拗な主張は彼の年来の思想的モチーフと無縁ではない。すなわち、一方において西欧合理主義の一面性のもたらず災厄を絶えず指弾しながらも、他方西欧文明の

根幹をなすキリスト教のもつ普遍的意義を承認する彼にとって、西欧文化は超克の対象ではあっても、決して全否定の対象ではありえなかつたのであり、その意味で、ロシア農民の無知を美化しこれを偶像化し、西欧文化一般を全面的に拒否しようとする考え方には彼は到底与することができなかったのである。また他方、急進的政治主義者の立場からする Hapod 人民説は、二〇年代以来のロマン主義者である彼の目からみれば、徒に国内の反目を助長し、西欧的な社会対立の図式をロシアに持ち込もうとするものに他ならなかつたのである。だが、彼にとっても Hapod が崇高な言葉であつたことには変わりない。さればこそ、この Hapod に蒙昧で怠惰な薄汚れた(と彼の考える)現実の農民大衆のイメージが紛れ込むことは、彼には許しがたきことであつたにちがいない。

ではキレーエフスキーにとって Hapod が貴重であつたゆえんは一体どこにあるのか、それを以下に見よう。

* * *

一八四五年に書かれた二つの評論の中には次のような一節がある。

「Hapod とは、風俗、習慣、言語、心的・知的諸觀念、宗教的・社会的・個人的諸關係、一言でいうなら、その生活のあまるところなき全体の中で、多かれ少なかれ發展して来た諸々の信念の総和でなくして一体何であろうか？」(I—152)

「Hapod とは何か、人々の集まりを Hapod とするものは何

か、Hapod たる要件は、多くの個々人が共に存在することではなく、外的には言語に、内的には世界と事物の秩序に対する共通の見方に表わされた認識の共通性、общность であり、風俗、習慣を生み出す一致した思想である。事物の秩序と原初形態 *первоначальство* に対する見解のこの共通性は、古代の諸 Hapod にあつては神話としてあらわれるところの、宗教である。」(II—98) (強調原文)

これら二つの引用を含む評論とは、それぞれ『文学の現状の概観』と『シェリングの講演』である。このうち、『講演』はシェリングの「神話哲学」「啓示哲学」の解説を旨として、彼の著作からの抜萃をつなぎ合せて構成されたものだが、先頃 E・ミュラーがシェリングの原典を対照しつつ『講演』の各部分の出所を明かにした。今、この考証により先に引用した部分に該当する箇所を訳出しておくこととする。

「Volk とは何か、何が Volk を作りあげるのか。それは明らかに、多数ないし少数の身体的に同質の諸個人のむきだしの空間的共存ではなく、彼らの間での認識の共通性 *Gemeinschaft* である。それはその直接的なあらわれを共通の言語にのみ持つのではない。我々はこの共通性それ自体、あるいはその基盤を、共通の世界観以外のいかなるところに求めるべきだろうか、そして、この共通性は Volk にとって本来的に、神話以外のいかなるところに保持され、それにもたらされうるものであろうか。」

シェリングの著作からの断片と先の二つの引用とを読み比べてみれば、キレーエフスキーの Hapod 観に対するシェリング

の影響は歴然としている。ただここで気付かれることは、彼自身の言葉で書かれた『概観』からの引用の中では、神話への言及が欠落していることである。これはおそらくキリスト教がロシアにとって外来の宗教であったという事実と無関係ではないだろう。彼によれば、ロシア文化の普遍性の論拠はあくまでも、純粋なキリスト教たる正教にあったのであり、従ってキリスト教の導入以前に溯る神話の時代に *Народ* の根拠を求めることは、彼の立論を危くするものであったにちがいない。彼が神話への言及を避け「諸々の信念の総和」という抽象的表現を採ったのはおそらくこのためであろう。とまれ、*Народ* の *Народ* たるゆえんを「信念の総和」と呼ぶか「神話」に求めるか、あるいは『講演』におけるように「宗教」と名付けるかはここでは二義的なことであり、真に枢要なことは、キレーエフスキーがシェリングに依拠しつつ、*Народ* を共通の信念＝信仰によって結ばれたひとつの精神的共同体とみなしていることにこそあるのである。

また、シェリングによれば「神話はそれ自身 *Volk* の運命であり……*Volk* に初めから与えられた宿命である」というが、キレーエフスキーにとっては、*Народ* の共通の信念＝信仰、宗教がその歴史の原動力 *Стихия* であり、国家存立の基盤であり、あらゆる文化の立脚点となるべきものであった。「*Народ* の知的生活の独自性を抹殺することは、その歴史を抹殺することと同様不可能である」(1152)と彼は書いている。また、キレーエフスキーが西欧近代の合理主義文化を批判しながらもそれ

を評価するのは、それが常に *Народ* の生活に根差したものであったからである。すなわち「西欧諸国の全ての文学の歴史は、我々に対して、文学の動向と *Народ* の文化の総和とが密接不可分に結合していたことを示している。このような不可分の関係は文化の発達と *Народ* の生活を構成している原初的諸要素との間にも存在する」(1145) 西欧文化の「あらゆる部門」が「互いに生き生きと浸透しあいつつ、不可分の渾然たる一体を作りなしている」のはこのためである。(1145)そしてキレーエフスキーにとってはこの「一体性」あるいは「全一性」こそ最上の価値であったのだ。その根拠となるべき、*Народ* の概念が貴重なるものであるゆえんはここにあると言ってよい。

しかるに、ビョートル大帝はカソリック信仰の上に成長した西欧文化をロシアに移植しようとしたことにより、元来正教信仰によって一つに結ばれていたロシアの *Народ* の一体性を破壊してしまったのだ。この結果、ロシアの *Народ* は二つの階層に分裂した。西欧的教養を身につけた「*Народ* の上層階級」、あるいは「ロシアの *Народ* のいわゆる教養ある階級」と「無教養な *Народ*」[思考力をもたない *Народ*] (1145) たる「下層階級」とがそれである。そして両者の間には越えがたい溝ができあがり今日に到っている。「疑いもなく、我々の文学的教養と、我が国の古代の歴史の中で発展し、今やいわゆる無教養な *Народ* の中に保持されている我が知的生活の古来の根源的力 *Стихия* との間には明瞭な不一致が存在する。この不一致は教養の程度の差ではなく、それらの完全なる異質性によるして

いるのである。」(I—150)更に、最晩年の執筆にかかる『断片』の中には次のようにみえる。「異国の文明は殆ど専らロシアの Hapod の上流の、いわゆる教養ある階級のものであったのに対して、ロシアの本源的文化は、未発達のままに、いわゆる ППО-СТОЙ Hapod (庶民) の風俗、習慣、内面的精神構造の中に保持されている。」(I—267) (強調原文)

従って、今日最大の課題は Hapod の本来の一体性の回復であり、分断された Hapod の再統合である。そのためにはまず知的精華たる上層階級がロシア古来の伝統に立ち帰り、下層の民衆の中に「未発達のまゝに」保持されているロシアの「根源的力」を領導することが大切だ。彼は早くも一八三九年、モスクワ地区の当時の学区主任、ストローガノフ伯への初等・中等教育に関する献策書の中で、下層階級の蒙を啓くことの必要とその方向を説き次のように書いている。「読み書きが Hapod にとって有益であるためには、何よりもまず文学の性格と、我が国において文学を生みだしている上層階級に支配的な思考様式を変える必要があります。」⁽⁶⁾そして、教育の眼目としては「Hapod の教育の方向は何よりも知育に先立ち、信仰の感情と道徳心の涵養とを旨とすること、この目的の達成にとって最良の手段は、教会の祈禱書が Hapod の諸觀念の発達と強化に直接役立つことを可能とするところの、教会スラヴ語の研究であること」等を挙げている。(強調原文)

四八年革命やクリミア戦争を前にしたキレーエフスキーの保守主義は、正教信仰を紐帯として Hapod を再び統合しようと

いう、右に見た志向の当然の帰結であった。彼は、西欧の革命的状況のロシアへの波及を恐れたニコライ一世の言論弾圧の強化を積極的に支持しつつ、政府の指導の下での国民の結束を説いている。「政府は今やあれこれと意見を申し立てる者の誰をも恐れるべきではありません。政府は、現時点において我々の全てが、ただひとえに、無益な戦争の混乱からロシアを救うべく、あらゆる二次的な利害を犠牲に供する用意のあることを確信すべきです。」(II—249) 更にくだり一八五三年一〇—十一月、クリミア戦争の始まった直後に書かれた手紙になると、彼はピョートル大帝以降の歴代のロシア政府に対する従来の批判を捨て、ロシアがすでに官・民ころを一つにした正教国家であることを言明するまでになるのである。(cm. II—276)

* * *

右に述べて来たような意味内容をもった Hapod にはどのような訳語が適切か。まず、シェリングの著作との比較から Hapod は Volk の訳語であることが知られるが、シェリングの Volk は通常「民族」と訳されるところから、ここでも同じ訳語があたりを思われる。だが、シェリングの Volk に対する訳語の妥当性の問題はさておくとしても、少なくとも、キレーエフスキーの Hapod に関する限り、この訳語にはひとつの重要な欠陥がある。それは彼の Hapod には人種概念が全く含まれていないという点にある。そのことは、例えば、彼がシェリングの教義を解説するにあたり、原典中にある「身体的に同

質なる諸個人」*physische gleichartige Individuen* という一句を完全に無視していることにもうかがえるし、また、『概観』からの引用にも、人種に関する言及は見当らない。その上、ヨーロッパ諸国やアメリカ、ポーランド等の国名について *Народ* という語を用いていることにも、この語のもつ非人種的性格の一端が示されていると言えるだろう。

では「国民」はどうか。だが、この語もまたキレーエフスキーの *Народ* のもつ意味合いを十全に表わしてはいない。何故ならば、今日普通、この語は何よりも一定の国家組織の中に住む者を意味しているのに対して、キレーエフスキーの *Народ* は本来的にいかなる政治的組織をも前提としない概念なのである。彼によれば、「思考様式の一致は行動様式の一致を要求せずにはおかず、同一の信仰は同一の習慣や家庭的・社会的諸関係の全般にわたる同一の体系を要求する。」(II—369) すなわち、キレーエフスキーにとって国家は共同の信仰生活の副次的所産にすぎず、信仰者たる *Народ* にとって最も本質的なものはあくまでも「神とその聖なる教会に対する関係」(II—271) なのである。

かくて、日本語の問題に還元した場合、「民族」から人種の概念を除去し、「国民」から国家のイメージを払拭したものが、それがキレーエフスキーの *Народ* だとどうなることになろう。しかし、そうした内容を的確に伝え、しかも、*Народ* とどう語のポピュラリティに匹敵しうるような日本語を、私は残念ながら知らない。とすれば、本来的には、やはり *Народ* は「ナロー

ド」と言う他はないのだが、他の *Народ* 観と比較するための便法として、敢えて一つの日本語に集約するとすれば、私は「国民」を選びたいと思う。何故ならば、人種というのびきならない区別の根拠に立脚した「民族」という語のもつ排外的なニュアンスは、キレーエフスキーの普遍主義的立場とは全く無縁だからである。シェンクはホイジンガによる愛国主義と民族主義の区別に触れて、「愛国主義に流れる主要な感情は愛着の一種であるが、ナショナリズムは自尊心の感情にもとづいており、これはともすれば自信過多の傲慢と攻撃に赴きやすいのである」と書いているが、ここにいう「ナショナリズム」、すなわち「民族主義」という呼び方は五—六〇年代以降のスラヴ主義者—例えばダニレーフスキーやレオンチエフ等にこそふさわしくはあっても、キレーエフスキーには決してふさわしくはない。キレーエフスキーはあくまでも穏健な保守主義者ではあったが、決して右翼—反動家ではなかったし、ましてや好戦的な右翼では断じてなかった。キレーエフスキーの *Народ* の主概念にとって「国民」という訳語がふさわしいと考えるのは、こうした理由によるのである。

(1) Вн. Давь, *Толковный словарь живого великорусского языка*, том II, СПб-М., 1881, стр. 461.

(2) 本稿は既に書いた論文『前期キレーエフスキーの思想』の副産物である。併読していただければ幸いである。
(金子幸彦編「ロシアの思想と文化」、近刊、恒文社)

- (3) E. Müller, Ivan Vasil'evič Kireevskij: Red Sellinga. 1845, Ein Dokument zur Spätphilosophie Schellings in Rußland, *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas* (1963), Heft 4, Band XI, S. 550—551.
 - (4) Ibid.
 - (5) E. Müller, *Russischer Intellekt in Europäischer Krise, Ivan Kireevskij* (1806—1856), 1966, Köln, SS. 485—496 によつて公表された。
 - (6) Ibid., S. 488.
 - (7) Ibid., S. 495.
 - (8) H. G. Schenk, *The Mind of the European Romantics, An Essay in Cultural History*, 1966, London, (邦訳「ロマン主義の精神」生松敏三他訳、みすず書房、一九六五年、二三—スージ)
- なお、引用文末尾のカッコ内の表記は「Полное собрание

сочинений И. В. Киреевского в двух томах, под ред. М. Гершензона, 1911. の巻数とページ数を示すものとす。

付記 キレーエフスキの「ナロード」については鳥山成人氏の論文「スラヴ主義の『民衆的性格』とイー・ヴェー・キーエフスキの「スラヴ主義」(北海道大学文学部紀要、2、一九五三年所収)の中でもすでに言及されている。本稿も氏の考察に多くを負っている。記して謝意を表するものである。しかし、あえて異を唱えたところがないわけではない。議論が煩瑣になることをおそれ異同については本稿の中で触れることはしなかったが、氏の論文をも併せて参照していただければ幸甚である。

(天理大学講師)